第八章　粟野の社寺を巡る

皆さんにとってお寺や神社はどのような場所でしょうか。不思議な力を感じたり心が安らぐという人もいることでしょう。

古代のアニミズム（自然信仰）や神仏習合、そして近代以降の神仏分離など、時代によって形を変えながらも民衆に寄り添ってきた神社や寺が粟野にはたくさんあります。しかし記録があまり残っておらず、その成り立ちについては分からないことも多いです。

本章では、粟野の代表的な社寺を、語り継がれてきた伝説や、それらを彩るエピソードとともに巡っていきましょう。

▲録事尊の絵馬（常楽寺録事堂）

粕尾の名医・中野智玄が雷神を治療している場面が描かれている。

コラム◎社寺の成立　その歴史的背景

古代の日本人は自然界のあらゆるものに神が宿るとし、畏れ敬ってきました。そのため山や樹木、岩など自然の中に祭祀場を作ったものが神社の始まりと考えられます。

六世紀に入ると百済（朝鮮半島にあった国）から仏教が伝来します。奈良時代には、聖武天皇が仏教の力によって災害や飢饉などから国家を守ろうと全国に国分寺を建立しました。こうした中、仏教が民衆の間にも浸透していき、各地にも小規模ながら寺院の原型となる施設が作られていきました。やがて仏教は神道と結びついた新たな形（神仏習合）となっていきます。平安時代末には神様は仏様の化身（権化）であるという考えから「権現」と呼ばれるようになり、神と仏の双方を取り入れた大らかな宗教観が成立しました。

江戸時代になり徳川幕府の支配体制が確立すると「村請制」と呼ばれる制度が導入され村単位に年貢や雑役が連帯責任で課されました。このような重い負担に苦しむ中、人々は「鎮守様」（村の守り神）をまつる場所で祭りを催し心と体を癒しました。こうした場所は今も神社や社・祠として多く残っています。また「寺請制」と呼ばれる制度が導入され、全ての人は寺院の檀家となるように義務付けられました。同時に家族構成などの情報が「宗門人別改帳」に記載され、寺院は結婚・旅行・移住等に必要な証明書を発行するほか、読み書きを教える寺子屋も運営するなど役所や学校のような役割も果たしていました。

明治時代になると新政府は、神道を国の宗教と定め、天皇を中心とした国家を目指します（国家神道）。このため神と仏を明確に分ける「神仏分離」の政策を進め、神様がまつられていた場所は新たに「神社」と呼ばれるようになりました。一方で寺院や仏像の破壊など仏教の弾圧も行われました（廃仏毀釈）。これにより寺院の数は約半分にまで減少したといわれ、またこのとき貴重な仏像や仏具等多くの文化財も失われてしまいました。

戦後、ＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）が「神道指令」を発令し、国家神道が廃止され政教分離の政策が進められたことにより、神社とお寺はともに一宗教法人として新たなスタートを切りました。

▲丁石（ちょういし）
県道草久粟野線沿いに賀蘇山神社への参詣道の目印となる「丁石」が残されている。氏子等の協力で建てられたと考えられ、明治４年（1871）の報告では57丁存在したとされるが、現在は12基が残されている。

常楽寺ー名医「録事法眼」の伝説ー

下粕尾の常楽寺は「雷除け」の信仰で知られ、江戸時代には雨が止むことを祈願した大きな白馬の絵馬が奉納されたこともあります。この信仰はかつて粕尾にいたとされる名医・中野智玄の伝説が元になっています（粕尾に実在した医師については20ページ参照）。それは一体どのような伝説なのでしょうか。

●雷神の病気を直した名医

智玄の娘・小春は難病を患っており智玄でも治すことはできなかったため、自分で治療法を探す旅に出るように申しつけました。小春は旅の途中で出会った老人からお灸の方法を教わり、病気を治すことができました。智玄はその治療法を知るため、小春の腹部を解剖してみると、その中に鳥がいて嘴にお灸が据えられていました。腹を割かれた娘の死を知った妻・桂は智玄を決して許しませんでした。その後修行の旅に出た智玄は後鳥羽上皇の治療のために召し出されます。病気を治した褒美に「録事法眼」の医名を賜った智玄が粕尾へ戻ると名医との噂を聞いた雷神が訪ねてきました。治療のお礼に雷神は二冊の医書を与え、さらに願い事をかなえてやると言います。智玄は氾濫の多い粕尾川の流れをしずめることなどを頼みました。それ以来、粕尾川では氾濫が起きなくなったといいます。

●録事尊の村廻り

粕尾地区には江戸時代から三〇〇年以上続く「録事尊の村廻り」という行事があります。これは智玄を「地蔵菩薩」、桂を「聖観音菩薩」、小春を「地蔵観音菩薩」として、厨子に納めた三体の仏像が地域の各家を巡る民間信仰の行事ですが、智玄と桂は不仲のため同じ家には留めないようにされています。こうした「巡行仏」は粕尾以外の各地でも見られますが、三体の仏像が廻るのは珍しい例です。上・中・下粕尾全ての村民に「録事尊」のご利益がもたらされることを祈った人々の思いの表れかもしれません。

《参考文献》
駒場一男『名医ろくじ法眼』二〇一五年

▲録事尊の巡行仏
右から智玄・桂・小春。

日光神社ー豊年杉と神仏習合の古社ー

●圧倒的な存在感の「豊年杉」

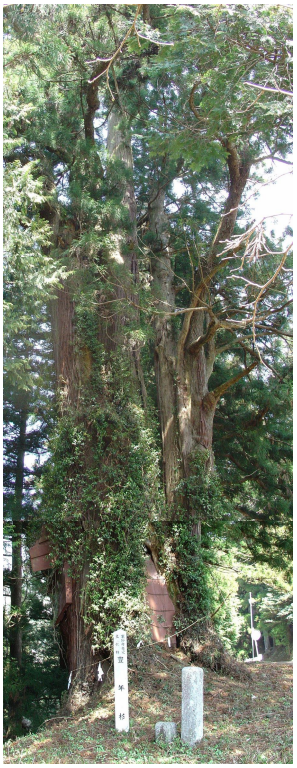
上粕尾半縄の双体道祖神二体の北数百mに日光神社があります。参道をたどり一の鳥居を抜け、巨大な豊年杉を横に二の鳥居を過ぎると社殿にたどり着きます。『広報あわの』（昭和四〇年四月号）に掲載された郷土史家・山本忠一郎「むかし話　日光神社の沿革」によってそのあらましを見ていきましょう。

日光神社の創建は延暦二二年（八〇三）といわれ賀蘇神社と称していたとされます。延文二年（一三五七）日光三社を合祀し、日光神社と改称しました。社殿造営には二〇年を費やしたといわれ、このとき植林された三本のスギのうち外周約一〇m・樹高四〇mに及ぶ一番大きな木が、市の天然記念物に指定されている「豊年杉」です。ご神木である豊年杉は樹齢六五〇年を越えると推定されています。昭和四四年（一九六九）の火災により根元の空洞部を焼かれましたが大事には至りませんでした。

●神仏習合の文化財群

現在の社殿は天正一五年（一五七八）に再建されたもので、前面の上部には見事な龍と狛犬の彫刻がほどこされています。日光神社の名前のとおりご神体は日光二荒山神社の分霊です。また、かつて強飯式が行われていたことを示すように強飯式用の食器も納められています。さらにお堂の中には金色御幣や文殊蔵王権現、そして阿弥陀如来や千手観音の神仏像が安置されている他、金剛懸仏があります。「懸仏」とは鏡板に仏の姿を刻んだり貼り付けたもので、壁に懸ける目的で釣り輪を取り付けるなどしたことから、こう呼ばれるようになりました。神の真の姿を現したものとして「御正体」とも呼ばれ、主に鎌倉時代から室町時代にかけて神仏習合の思想に基づいて作られました。

明治時代初期の廃仏毀釈により、各地の貴重な仏像などが多く失われましたが、日光神社は山深い地が幸いして難を逃れられたのでしょうか。神も仏も併せて受け入れた民衆の大らかな信仰の名残を豊年杉は変わらず見守っています。



▲豊年杉

賀蘇山神社ー県内屈指の古社ー

●二つのオザク山と「遥拝殿」

上久我の「石裂山」には加蘇山神社がまつられる一方、入粟野の「尾鑿山」には賀蘇山神社があります。この二つの「オザク山」は頂きを一つとした同じ山の表裏になっていますが、全く別々の歴史を歩んできました。

賀蘇山神社は、尾鑿山をご神体とする山岳信仰の霊地で、元慶二年（八七八）に「従五位下」という神階を授かった記録が『日本三代実録』にあります。尾鑿山の山頂付近には生産の向上をかなえる「賀の岩」、医薬長寿をかなえる「蘇の岩」という二霊岩があり、古くから人々の信仰を集めていたとされます。近世になるとそのご利益を求め関東一円より「尾鑿山講」の参詣者が訪れました。寛永一八年（一六四一）に着工し、父子二代六〇年の歳月を経た遥拝殿が元禄一四年（一七〇一）に完成し、おおむね現在と同じ建造物群がそろいました。遥拝殿の周囲には精巧な彫刻が配され、四〇頭を数える龍の他、四隅を守る獅子と象、正面には見事なリスとぶどうの透かし彫りがあります。遥拝殿は、市の指定有形文化財に指定されています。

●災害を越えて残る「大杉切株」

本殿の西側には大杉の切株があります（鹿沼市指定天然記念物）。これは明治四三年（一九一〇）まで立木の姿で現存していた「神代杉」で樹高七〇m、外周一四・八m、樹齢一八〇〇年の日本最古級の巨木でしたが、同年の落雷、大正六年（一九一七）の火災により切株の姿となってしまいました。おそらく日本最大であったという神代杉は、今でもご神木として人々の崇敬を集めています。

《参考文献》
『尾鑿山石造物調査資料集』賀蘇山神社、二〇二三年
「神社めぐり（五）賀蘇山神社」『広報あわの』粟野町、一九七二年

▲明治時代の神代杉

医王寺ー県内随一の文化財の宝庫ー

●医王寺の誕生にまつわる伝承

病気や苦しみを癒すご利益があるとされる薬師如来を本尊とする北半田の医王寺の起源について、お寺の伝承などを記した縁起では次のように伝えています。敏達天皇の勅願により聖徳太子が薬師如来を造立して伽藍（敷地や建造物）が整えられ、空海（真言宗の開祖。弘法大師）が東国を巡った際に自らの像や不動明王を納めてこの地を道場としたことから、のちに「東高野山」と呼ばれるようにもなった、と。一方、日光山を開山した勝道が夢のお告げに従い山中から発見した薬師如来を新しく建立したお堂に納めたという伝承もあります。

●境内の建造物群

医王寺は現在、栃木県指定三〇件、鹿沼市指定四件の有形文化財を所蔵しており、まさに文化財の宝庫といえます（☞25ページ（粟野の指定等文化財一覧））。

まず境内を散策する参詣者の目を楽しませてくれる建造物群を紹介しましょう。南側から境内へと続くゆるやかな坂の参道を登り、迫力ある「木造 金剛力士像」が左右に出迎える仁王門をくぐると、佐野天明の鋳造技術による「銅造 地蔵菩薩半跏像」（江戸時代）が目に入ります。その奥には高さ二〇ｍにも及ぶ茅葺屋根と弁柄（天然の赤い顔料）塗りが目を引く「金堂」が控えています。約三万坪という面積を有する医王寺の境内には金堂を始め九棟の建造物が並んでおり、ここが真言宗の一大霊場であったことを物語っています。江戸時代の寛永年間（一六二四～一六四四）に伽藍を焼失したと伝えられますが、一七世紀後半から一八世紀半ばに掛けて再建されました。弘法大師像（鎌倉～南北朝時代）をまつった「弘法大師堂」、そして日光東照宮陽明門と同様の技法を取り入れた「唐門」はいずれも茅葺屋根の建物です。また北奥の「講堂」は平面が二六×一六ｍの寄棟造茅葺型銅葺屋根の建物で、現在も法会に使用されています。講堂東北に位置する「客殿」は建坪百坪近い寄棟造の建物で、戸を外せば百数十畳の大広間となります。

●とちぎの宝　医王寺の仏像

下野に花開いた仏教文化を現在に伝えるかのように、医王寺の仏像群は質、量ともに充実しています。古いものでは平安時代と推定される五体が残されており、創建に関わる尊像「薬師如来像」、医王寺では最古の仏像「十一面観音像」「不動明王立像」「不動明王及び二童子像」（不動明王のみが一二世紀後半）「象座」があります。また、鎌倉時代と推定されるものは一〇件二六体あり、中でも「薬師如来及び両脇侍像」「十二神将立像」「弥勒菩薩坐像」、前述の「金剛力士像」の四

件一八体については作風や構造技法から見ると同時代の一連の制作であった可能性があります。このことからこの時代の医王寺にはこれら一群の仏像を造り、そしてそれらを納めるお堂を建てるだけの力があったと考えられます。

●医王寺花まつり

皆さんは「花まつり」という行事を知っていますか。これはお釈迦様の誕生日である四月八日に寺院などで、小さなお堂「花御堂」を花で飾り、そこに安置された誕生仏に参拝者が甘茶を注いでお祝いする行事です。花まつりの始まりなどは不明ですが、かつて本尊を安置していたといわれる「医王寺本堂内春日厨子」に「康応二年庚午卯月八日造立之」（一三九〇）、また「誕生釈迦仏立像」にも「寛文五年乙巳四月八日」（一六六五）と記されていることなどから、医王寺でも古くからこの日にお祝いを行っていたことが分かります。「医王寺花まつり」は現在は五月三日に行われており、二年に一度、冠や金襴の上衣などの衣装を身に付け花を手に携えた子どもたちが稚児行列を行います。

長い歴史のある医王寺は、このように現在も身近なお寺として地域の人々に親しまれています。

《参考文献》
『東高野山医王寺金堂平成大改修落慶記念　医王寺の仏像』医王寺、二〇一二年
國立恵俊「ふるさと再発見　北半田花まつり」『広報あわの』粟野町、一九八三年

▲薬師如来像（平安時代）

▲医王寺花まつりの稚児行列

小松神社ー名人神山政五郎の彫刻ー

皆さんは清洲地区に二つの小松神社があるのを知っていますか。一つは深程にある御霊小松神社、そしてもう一つが「天下弐関白流獅子舞」でも知られる久野の小松神社です。この小松神社の本殿は、再三火災にあっており、現在の本殿は、慶応三年（一八六七）から明治元年（一八六八）に掛けて再建されたものです。

●菊彫りの名人「菊政」

本殿の周囲は総ケヤキの見事な彫刻で飾られています。これらの彫刻は刻銘板から「神山政五郎、門人泰輔政行、常吉政次」の作と分かります。政五郎は、文化五年（一八〇八）鹿沼市上久我の農家に生まれました。背が高く温厚な人柄で、三味線を弾き好んで端唄を歌っていましたが、ひとたび鑿を手にすると寝食を忘れ木彫りに取り組んだといいます。特に菊の彫刻を得意としたことから「菊政」と称されました。政五郎が手掛けたとされる菊の彫刻は鹿沼の石橋町屋台でも見ることができます。

小松神社本殿彫刻は政五郎が六一歳のときの作です。胴羽目には能楽の「高砂」に由来する「翁と姥」や「松と鶴亀」など長寿や夫婦円満を願ったもの、「童子四人と日の出」、「天岩戸開きの図」など故事を題材としたものなど全一二点の彫刻が施されています。さらに腰の部分には田起こしから収穫・脱穀・倉入れまでの農耕の場面を描いた六点の彫刻が施されています。農家出身である政五郎らしく深い愛着を持って農民の苦労や喜びを的確に表現した力作です。

これだけの彫刻を備えた本殿を建てるには相当の資金が必要であったことが想像されます。人々の長寿や豊作への願い、そしてその想いを受け止めた見事な彫刻は毎年一〇月の小松神社の例祭でじっくりと鑑賞することができます。

《参考文献》
田中敏和「ふるさと文化財めぐり　小松神社本殿彫刻②　彫工神山政五郎」『広報あわの』粟野町、一九八五年

▲小松神社本殿
鹿沼市指定有形文化財（平成10年指定）。上：「翁と姥」の図。下：農耕図の内田起こし。

光明寺ー梵鐘が語る二つの歴史ー

●戦後古峰ヶ原からやってきた梵鐘

口粟野の光明寺の山門を入るとすぐ右に緑青を帯びた梵鐘が釣るされています。梵鐘とはお寺の大きな鐘のことですが、「三春の鐘」とも呼ばれるこの梵鐘は粟野ではもっとも古く、刻銘から天保三年（一八三二）の作と分かります。しかしこの鐘は実は昔からここにあったものではありません。昭和一七年（一九四二）、戦時中の物資不足の中「金属類回収令」により光明寺の梵鐘も供出させられてしまいました。戦後、昭和二七年（一九五二）、西大芦村の古峰ヶ原に供出を逃れた別の梵鐘が残されていることが分かると、檀徒たちが中心になり寄付を集めこれを買い求めました。このときのいきさつは鐘の中帯に刻まれています。その一節に「当山惣担中ノ寄付ニヨリ平和条約記念トシテ之ヲ求ム」とあります。供出により梵鐘が失われた寺が多い中、二度と同じことを繰り返してはならないという平和への願いを感じることができます。

●古峰ヶ原信仰を伝える歴史資料

全国の約九割の梵鐘は供出により失われたため、戦前の梵鐘は大変貴重ですが、この梵鐘にはもう一つの歴史的な価値があります。鐘の銘文には「奥州三春・遠山澤村金剛院・役末龍養信」「奉納金剛山」とあることから、遠山澤村（現在の福島県田村市船引町）にある金剛院の修験者のリーダーである養信を中心とした人たちがこの鐘を金剛山に奉納したことが分かります。古峯神社はかつて「古峯金剛山」と呼ばれる修験道の聖地として各地に広く信奉者がいました。この刻銘は、東北地方における古峯金剛山への信仰（古峰ヶ原信仰）を現在に伝える貴重な歴史資料でもあるのです。

《参考文献》
國立惠俊「ふるさと再発見 光明寺鐘の由来」『広報あわの』粟野町、一九八五年

▲光明寺梵鐘
鹿沼市指定有形文化財（平成 24 年指定）。